蜘蛛

豊島与志雄

蜘蛛は面白い動物である。近代人的な過敏な神経と、偉人的な野性と、自然的な神秘さとを具えている。

近代人の神経は、何かしら不健康で不気味である。本物の動物的なものから根こぎにされたような趣きがある。運動的知覚がひどく鈍く、感情的知覚がひどく鋭い。この運動の方面の知覚と感情の方面の知覚とが、不均衡になればなるほど、益々病的に不気味になってゆく。——蜘蛛を見てもそういう感じがする。始終巣の真中にじっとして餌物を待ちすましてるところは、苛ら苛らしながら日向ぼっこをしてる近代人の俤がある。そして巣の僅かな微動にも緊張した神経が震えお

ののく様は、単なる触知でなしに、感情的知覚の域にまでふみこんでる概(おもむき)がある。あのものぐさと敏感さとには、何かしら病的な不気味なものがある。

偉人は凡て野性を有するというのは、否、野性を有していなければ偉大な仕事は出来ないというのは、私の持論である。都会人的な巧妙さと精緻さとでは、大きな仕事は成されない。野性と云うのに語弊があるならば、大地の中に根を張ってつっ立ってる力とでも云うような、何かしら人為的でない後天的でない本質的な力である。トルストイやバルザックやセークスピアの偉大さは、そういう力に依ってるところが多い。ト

ルストイが如何に無抵抗の宗教を説こうと、彼の力は畢竟肉食的な野蛮な力の上に立っている。——蜘蛛にはそういった野性がある。彼が如何に精巧な巣を張ろうと、如何に過敏な神経を持っていようと、それは到底文明的な所産ではない。文明的な所産となりきれないほど、彼のうちには肉食的な野性がある。細い糸に懸って空に浮んでいても、地を這う虫けらよりも、遙に大地的であり遙に野性的である。

昔の人は、自然に対して一種の神秘的な恐怖を懐いた。そこから、自然力崇拝の宗教まで生れた。然るに、人間の数が増し文明が進むにつれて、そういう宗教は、

そういう神秘的恐怖は、遠く山間僻地へ追いやられて、跡を絶とうとしている。けれども文明のさなかにも、都会の真中にも、ふとその痕跡が見出されることがある。——蜘蛛はその一つである。薄暗い土蔵の二階、物置の片隅、階段の裏などに、大きな蜘蛛の巣が張られていて、その真中にあの不気味な怪物が控えている時、人の心には知らず識らず、一種の神秘な恐れが湧いてくる。妖怪屋敷や廃墟壊屋に、いつも蜘蛛の巣がつきものとなっているのは、自然そのままの現象ではあるが、また人の心の自らなる連想作用でもある。

蜘蛛のうちでも最も傑出しているのは、女郎蜘蛛で

ある。多くの蜘蛛はどす黒い汚い色をしているのに、彼だけは、背と腹部とに幾筋もの金線をめぐらして、誇らかに光り輝いている。多くの蜘蛛は昼間隠れて夜分姿を現わすのに、彼だけは、白昼も傲然と巣の真中に逆様に控えている。体軀も比較的大きく、最も精悍である。

その女郎蜘蛛が、東京の市内には見当らない。私は未だ嘗て市内でその姿を見たことがない。他の蜘蛛は、それぞれの種類を市内で見かけるが、女郎蜘蛛だけはどこにもいない。けれども、東京の周囲、大森、玉川、赤羽、市川などには、女郎蜘蛛が沢山いる。

昨年の初秋、私は玉川に行ったついでに、大きな女郎蜘蛛を五六匹捕えてきた。ミルクの空缶に草の葉を軽くつめ、その間々に蜘蛛を入れ、四方に錐で空気ぬきの穴を拵えて、紐で下げて来たのだが、蜘蛛は別に弱った風も見えなかった。庭の木に放すと、のそりのそり梢の方へ這い上っていって、枝葉の茂みに隠れてしまった。

その晩私は楽しく眠れた。「土蜘蛛」や「滝夜叉姫」などの物語を空想することは、吾々の生活を豊かにしてくれる。

そして翌朝、いつもより早く起き上ってみると、何

という愉快さだったろう。庭の木々の梢に、あちらこちらに、美事な大きな巣が張られていて、その真中に女郎蜘蛛が一匹ずつ、逆さにじっと構えこんで、背と腹の金筋を朝日に輝かしているのである。私は嬉しさの余り、妻や子供達を呼んだ。子供達は初めて見る女郎蜘蛛の不思議さと美しさに眼を見張った。美や神秘に対する子供の敏感さよ。だが、田舎の子供達は、女郎蜘蛛の巣で蟬取りの道具を拵えて遊ぶのである。

　それから私は毎日、女郎蜘蛛を眺めて暮した。少しでも変な気配があれば、蜘蛛は巣を揺ぶって警戒する。蠅や蛾が巣にかかれば、一瞬の猶予もなく、飛びつい

て、くるくると白糸でからめて、巣の中央に持ち返り、暫く様子を窺ってから口をつける。生血を充分に吸う時その腹は大きくなり、食物の不足な時には心持ち小さくしぼんで見える。カステーラの屑を放ってやると、白糸でからめておいて食いつきはするが、やがてそのまま下に落してしまう。私は幾度も、蛾や甲虫などを生捕って投ってやった。青空の下にすかし見る蜘蛛の姿の、足が長く伸び腹が円くふくれて、背と腹の金筋が美しく輝き出すのが、私の喜びであった。

けれども、蜘蛛は余り幸福でなさそうだった。風のために巣の破けることが多かった。餌も不足がちのよ

うに見えた。早朝仄暗い頃、蚊の類の小さな羽虫が沢山引っかかってる破れ巣の横糸を食ってしまい、新らしい完全な巣を張ってしまうのを見定めて、私はそれに投げ与えるべき大きな昆虫を、どんなにか探し廻ったことだろう。そのために幾日か、太陽と共に起き上ったものである。

そして凡そ十日ほど過ぎた或る日の午後、私は一つの蜘蛛の巣に珍らしい光景を見出した。巣の中心から少し下の方に、蜘蛛がじっと動かないでいる。その一本の足に、羽の黒い足の長い赤蜂が、喘ぎながら一生懸命に喰いついていている。蜘蛛は後ろ向きになったまま

動かない。蜂は全身の力を口に籠めて、足先で蜘蛛の巣を払い落そうとしている。蜘蛛の足が喰い切られるか、蜂の足が巣の糸に絡まってしまうか、恐らく必死の努力であろう。

私は一人気を揉んだ。勿論蜘蛛に味方してである。然し迂濶に手出しは出来ない。やがて、蜂がぱっと飛んで逃げようとした。とたんに、蜘蛛はくるりと向き直るが早いか、くり出す白糸で蜂を絡めた。次にはもう、蜘蛛の足先でくるくる廻転されてる真白なものに過ぎなくなった。凡てが一瞬間のうちの出来事だった。私は蜘蛛の勝利を祝した。

私はそれですっかり安心してしまった。赤蜂は庭にいる虫類のうちの最も獰猛なものである。それに打勝つとすれば、蜘蛛にとっては万々歳である。

ところが、それから二三日後の午頃、一つの巣の蜘蛛が見えない。そして巣の真中から、一筋の糸が長く垂れている。私は驚いて庭へ下りていった。巣から垂れた糸は、低い躑躅の茂みにはいり、更に地面へ達していて、そこに、女郎蜘蛛がぐったり腹這っている。そして驚くべきことには、躑躅の茂みの周囲に、一匹の赤蜂が飛び廻っていて、夢中に何かを深し求めてるかのように、私が側へ行っても逃げようとしない。私

はかっとなって、女中を呼んで蝿叩きを取寄せ、蜂を叩き潰してやった。それから、静に蜘蛛を掌に取上げた。

蜘蛛はぐたりとなったまま、生きてるのか死んでるのか分らなかった。傷はどこにも見えず、姿勢もくずれてはいないが、動く模様が更にない。私はそれを室の隅に上から笊を被せておいた。そして二三日たっても、蜘蛛はそのままで生き返らなかった。そのまるで生きた通りの蜘蛛の死体を、私は庭の隅に埋めた。

それから赤蜂の害が屢々起った。私は赤蜂の姿を見かけると、蝿叩きで叩き潰してやった。が赤蜂は次か

ら次へとやって来た。三四匹一緒に飛んでることもあった。女郎蜘蛛の姿が巣に見えないなと思うと、それは大抵一筋の糸で巣から地面に落ちて、死体となってしまっていた。背と腹との間のくびれた急所に、蜂から喰いつかれたらしい傷跡が見えるのもあった。
そして、玉川から来た私の庭の女郎蜘蛛は皆、赤蜂のために害せられてしまった。残ってるのはただ、昼間隠れていて夕方から巣に出てくる泥坊蜘蛛ばかりである。
女郎蜘蛛のあの美しい色彩は、太陽の光の中で赤蜂の好目標となるのかも知れない。恐らく赤蜂は背後か

ら狙い寄って、背と腹との間の急所に喰いつくのであろう。然し、その死体を別に食うのでもないらしいところを見ると、何故の襲撃か訳が分らない。それについては、何れ学者の示教を乞いたいと思っている。が兎に角、赤蜂が跋扈して女郎蜘蛛が滅びるということは、淋しいことである。

田舎に旅をして、静寂な自然と素朴な人事とに接する喜びの大半は、都会人としてそれらに接するところにあるということが、一面の真理であるとするならば、都会に住んで庭に蜘蛛の巣を張らして楽しむのは、野人としての楽しみであるというのも、一面の真理かも

知れない。然しながら、蜘蛛を嫌う者は性格的に弱者であり、蜘蛛を好む者は性格的に強者であると、そういうことが云われないものだろうか。偏奇な趣味の対象としては、蜘蛛は余りに多くのものを持っていると、蜘蛛好きな私は勝手な考え方をしたいのである。

底本：「豊島与志雄著作集　第六巻（随筆・評論・他）」未来社
１９６７（昭和42）年11月10日第1刷発行
入力：tatsuki
校正：門田裕志
２００６年４月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。